# マスカーレイドに異常なし！？　第６話　レイン帰宅

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マスカーレイドに異常なし！？　第６話　レイン帰宅

【Ｎコード】
Ｎ９０５９Ａ

【作者名】
水鏡樹

【あらすじ】
マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第６話では、ニオの父親であるレインの帰宅により、いつもとは違うオートエーガンの一日が始まる。アルマは秘密を守り通すことができるのか？

## その1：いつもと同じ朝

シェラフィール＝ファインドイット——シェラの朝は早い。いや、正確には最近になって早くなってしまったのだ。

傭兵としての仕事をしている頃は、仕事の都合上早起きすることはあった。だがそれはあくまでたまにであり、毎日ではない。

シェラが起きるのは太陽が地平線にようやく頭を覗かせる時間帯だ。

あくびまじりにベッドから起き上がると、乱雑に入り乱れる緑色の髪をそのままに着替えをする。ここも傭兵時代とは違い、鎧と剣を身につけるわけではなく白いブラウスに紺のジーパンという普段着である。

何度も命を守ってくれた、銀の胸当てと手にフィットする使い慣れたツーハンデットソードは、ハンターたちと一緒にサイクロプスを相手にしてから、いっさい着用していない。そのまま部屋の隅へとおしやられて、ほこりをかぶりつつ主をにらみつけていた。

「悪いね……」

謝りながらシェラはほこりを払い、近場にあったタオルをほこりよけにとかけてやる。代わりに室内に干してあったエプロンをつかむと、部屋から外に出た。目的地はもちろん、就業地であるオートエーガンである。

シェラの朝はいつも早い——だが、ニオの朝はもっと早い。

シェラがオートエーガンに入ると、いつもニオが笑顔で迎えてくれる。その頃になるとニオの額には粒状の汗が吹き出しているのだから、相当早い時間から準備をしているのだろう。

本来ならシェラもその時間帯から、働かなければならないのだろう。だがニオは今の時間帯でいいと言ってくれている。元々毎日のように一人で準備をしていたのだから、これでも相当助かっているとも。

オートエーガンの裏口までシェラが足を運ぶと、両頬を両手で叩きつける。眠気覚ましと仕事に対して気合を入れるための、シェラの習慣だった。

「おはよう、ニオ！」

元気な声で挨拶しながら、シェラがオートエーガンの中へとはいる。だが、返ってきた返事はいつもと違っていた。

## その2：いつもと違う朝

「おっ、おはようシェラ。今日もかわいいな」
見え透いたお世辞をつぶやきながら、せっせと開店の支度をしているのはニオの母親であるアルマだった。いつも手に持っている酒瓶はなく、代わりに握られた包丁は魚の下ごしらえを難なくこなしている。
頭には三角巾を巻き、エプロンを着けたアルマの姿――普段なら絶対に見られない光景だ。
「おはようシェラ……」
別の方角からニオの声が聞こえ、シェラがそちらへと目をやる。ニオは逆に普段見ることのないエプロンのない格好だ。テーブルの上にあごを乗せ、口にくわえたストローを上下に動かしていた。
「ニオ、具合でも悪いの？」
「いや、体はいたって健康だよ」
「じゃあ、なんで……」
その続きはいわなくとも、ニオには理解できていた。返答の代わりに一通の手紙をシェラへと渡す。
その手紙の差出人のところには、レイン＝グロスという名前が書かれていた。
「レインってだれなの？」
「お父さん」
「ええっ！　ニオってお父さんいたの！？」
ズルッと、ニオのあごがテーブルから滑り落ちる。
「あのねぇ、わたしだって木の股から生まれたわけじゃないのよ？」
「あ、いや、その、そういう意味じゃなくてね。いままで見たことなかったから、もう亡くなってるのかなぁって、想像してたんだけど……」
「勝手に殺すなよ……」

ボソッとつぶやいたアルマに、シェラがペコリと頭を下げる。アルマは鼻を鳴らして、作業へと集中していった。
「ちゃんと生きてるよ。いわゆる単身赴任ってやつ？　配送業を仕事にしてるから、いろんな街を駆け回ってるんだ」
「へぇ……」
感心しながら、シェラがアルマのほうをむく。いつもニオの姿がある場所にアルマがいるというのは、正直なところ信じられない光景だった。普段は酒を飲みながら横槍を入れて、笑っているだけのアルマが、ニオ以上に手際よく開店準備を進めているのだ。
「アルマさんって、ちゃんと仕事できるんだ……」
「ん？　なんか言ったかしら、シェラ」
にっこりと微笑むアルマのこめかみに、うっすらと青筋が浮かんでいる。慌ててシェラは両手を振って否定すると、アルマはすぐさま自分の仕事へと戻っていった。
「で、そのお父さんがなんだって？」
「帰ってくるの。マスカーレイドに配送の仕事が入って、なおかつその担当がお父さんになったときにだけ、ここへ顔をみせるってわけ」
「ふーん、それとアルマさんが働くことと、いったいなんの関係が？」
疑問を抱きながら、ニオの横にシェラが腰掛ける。ニオはストローを捨ててから、棚の一角を指差した。
本来ならそこにはアルマご用達のお酒が並んでいるはずだった。だが、いつのまにやら調味料のラベルのビンへと切り替わっている。
「アルマさんのお酒、どうしたの？」
「あれ全部そうだよ」
「えっ？　だって……」
「ラベルだけ張り替えてるの。見た瞬間にお酒だってばれないようにね」
シェラは確認のため、醤油とかかれたビンの蓋を開けた。中から

はツーンとした、アルコールの匂いが漂ってくる。
「おいシェラ、その酒は高いんだから飲むんじゃないぞ！」
アルマに一喝されて、慌ててシェラはビンを元の棚へともどした。言ってることは間違いなくアルマだが、はきはきと動き回る姿というのは妙に落ち着かない。
「どうしてこんなことするわけ？　急に働き出したりさ」
コップに一杯の水道水を入れて、座っていた椅子へと戻りながら尋ねる。ニオも手持ちぶさたで落ち着かないのか、新しいストローを新たに咥えていた。

## その3：約束

「お母さんはお父さんとの約束があるのよ」
「約束ってなにを？」
「禁酒」
ブーッ！
シェラは飲みかけていた水を、思いっきり噴出していた。じろりとアルマににらまれ、ニオがテーブルの上に飛び散った水を拭く。
「禁酒って、あのお酒をやめるってやつでしょ？」
「そう、その禁酒」
「アルマさんが禁酒なんて、できるわけないじゃん！」
「そう、できるわけがないの。だからお父さんが帰ってくるときだけ、こっそりとラベルを張り替えて凌いでるってわけ。お父さん忙しいから、次の日には帰っちゃうしね」
「ニオ、ちょっとしゃべりすぎだぞ！」
米をとぎながら、アルマがニオへと目を吊り上げる。だがニオは負けじと反論していた。
「どうせみんな知ってることじゃない」
「知らないのに教える必要はないだろ？」
「ふーん。じゃあ、悪気のないシェラの口から、お母さんがいつもお酒を飲んでるって言われてもいいんだ」
「ぐっ……」
この口論はあきらかにアルマの負けだった。そのしわ寄せが、シェラへと向けられる。
「いいな、わたしがお酒を飲んでることは絶対にばらすなよ！　もしシェラの口からもれたら、めくるめくお仕置きが待ってるからな！」
「は、はひ……」
いままでいろいろなモンスターを相手にしてきたシェラもたじろ

いでしまう、まるで般若のようなアルマの形相だった。ふらふらと後ずさり、背中を壁にぶつける。
「まあ、それで結婚したわけだけど、結婚の条件ってのが禁酒だったわけよ」
「それからずっと、守ってるフリをしてるってわけ？」
「そんなとこかな」
アルマを見ると、時折不気味に笑いながら手が止まっている。どうやら帰ってくる最愛の人のことを想像しているらしい。
「お父さんが帰ってくる日は、お酒も飲まずに一生懸命オートエーガンを支えている姿を見せようとしてるわけよ」
「それでアルマさんが全部仕事をこなしてるのか……」
「だから今日はゆっくりしてていいよ。きちんと給料は払うからさ」
突然告げられたニオの申し出に、シェラは目を丸くした。自分を指差しながら、慌てて問いただす。
「えっ、わたしの仕事は？」
「特にしなくてもいいよ。もともとこのお店はお母さん一人で切り盛りしてた店だからね。わたしなんかより効率よく仕事するから、シェラの出番もないと思う」
「じゃ、じゃあ帰ってもいいわけ？」
ニオはうーんと唸りながらあごに手をやり、少しの間考え込む。だが、真剣な表情はすぐさまいたずらっ子のような含み笑いへと変貌していた。
「帰るのは別にかまわないけど、ここにいたら面白いと思うよ？」
「面白い？」
「普段見慣れないお母さんの姿が見れるし、それに……ウシシシ」
かすれた笑いを放ちながら、口元に手をやる。シェラはあまり理解してないのか、首をかしげるだけだ。
「まあいいから、座って座って！」
シェラのそでをひっぱって、隣の席へと無理やり座らせる。意味もわからないままシェラはアルマの仕事ぶりに目をやった。

確かにアルマの仕事は素早かった。いつもニオの仕事ぶりをみているシェラも、うーんと唸り声を上げてしまう。一つ一つの動作に無駄がなく、効率よく開店の準備を進めていった。

## その４：ポルターガイスト現象

開店と同時に、いつものメンバーであるマックスやハンターが姿を現す。アルマの仕事をしている姿でレインの帰宅を察知しては、なにやら含み笑いを浮かべつつ早めに店を後にした。
開店から閉店までをほとんどオートエーガンで過ごすクネスまでも、早々と店を後にしていく。
「レインさんって、怖い人なの？」
シェラがふと浮かんだ疑問をニオへとぶつける。ニオは大きく首を振った。
「いやいや、全然怖くないよ。いまはね」
「いまはって……」
「昔は結構やんちゃだったらしいよ。まあそれがきっかけでお母さんと出会ったみたいだけど」
「へぇ……聞きたいな、その話」
興味津々でニオに寄り添うシェラ。ニオは横目でアルマのようすを伺った。
レインはまだ帰宅していないが、アルマは仕事に一生懸命で二人をかまっている暇などなさそうだ。
「うーんとね……」
耳元でひそひそとニオが語り始めると、シェラはだまってニオの話に耳を傾けた。
「なんでもお母さんは有名な不良娘だったらしいの。でも美人だったからもててたらしくてね。いろいろ言い寄ってくる男はいたらしいけど、交際の条件としていつも同じ条件を出してたらしいよ」
「同じ条件？」
「わたしに飲みくらべで勝てたら、交際してあげるってね」
「ハハハ……アルマさんらしいかも」
苦笑いを発するシェラに、一瞬だけアルマが反応を示す。だが、

仕事が忙しいのか、すぐに興味を失ったようだ。
「それで、レインさんがアルマさんに勝ったってわけだ」
「うーん、それがねぇ……」
首を傾げながら、ニオが物思いにふけった。すこし考え込んでから、ゆっくりと口を開く。
「なんでもお母さんが、お父さんに一目ぼれしたらしいんだよね」
「へっ？」
「お父さんは別にお母さんのことを好きでも嫌いでもなかったらしいだけど、周りに勝負を挑むように仕向けられて、お母さんはわざと負けたって話なの。まああくまで噂なんだけどね」
「でもアルマさんなら、やりそうな気もするわね……」
「でしょ？」
ぶえっくしょん！
突然アルマの口から、大きなくしゃみが放たれる。二人は顔を見合わせながら、クスクスとアルマから顔を隠しながら笑った。
「じゃあ、なんでみんな足早に帰っちゃうの？」
「ああ、それはね……」
シェラの素朴な疑問にニオが答えようとすると、豪快に店の入り口の扉が開いた。備え付けられた鈴が、いつもより激しくお客さんの入店を知らせる。
「レイン！」
「アルマ！」
入ってきたお客さんの顔を見るなり、アルマはカウンターを飛び越えていた。レインが近づいていくと、アルマが勢いよく抱きついていく。
「あわわわ……」
両手を顔の前にやり、シェラが頬を真っ赤に染める。ニオも少しうつむき加減になりつつ、わずかに頬を染めた。
「あてられるから、みんな帰っていくのよ」
「……納得」

指と指の間からこっそりと二人の抱擁を観察しつつ、シェラが相槌を打つ。
しばらく抱き合っていた二人が離れ、レインの視線がニオたちへと注がれた。
レインはグレー色の作業着のような服を着ていたが、暑いのか胸元が大きく開いている。金色の短髪は固めているのか剛毛なのか、重力に逆らい天井へとむいている。
二重まぶたが二、三度まばたきを繰り返すと、潤った瞳が光を放ち始める。アルマでなくともレインに惹かれる人は多かっただろう。
「アルマ、酒は飲んでないだろうな？」
抱擁からはなれたレインが尋ねると、アルマの親指が天井へと向いた。
「当然だろ、なあニオ？」
平然と言ってのけたアルマに、ニオは慣れているのか肯定も否定もせずににっこりと微笑むだけだ。ただ隣にいるシェラの笑顔は、あからさまにひきつっている。
「お帰り、お父さん」
「ただいまニオ。いい子にしてたか？」
「うん、もちろん」
ニオはつかつかとレインに歩み寄るとゆっくりと腕を腰へと回した。だが、アルマのときのような熱い抱擁ではなく、親子の信頼を確かめ合うような軽いものだ。
「こちらの方は？」
体をスッと放し、シェラに手をやる。すると背後からレインの肩に手が置かれた。
「シェラっていって、ウエイトレスとして雇ってるんだ」
アルマがシェラを紹介すると、
「は、初めまして。シェラフィールです。ニオとアルマさんにはお世話になってます」
「レインです。こんなお客さんの少ない店でウエイトレスなど、暇

ではないですか？」
　紳士的な口調で、シェラの手を握る。シェラはまるで茹蛸のように頬を染めつつ、
「は、はひ、今日はいつもと違ってアルマさんが……」
　バギャ！
　どこから飛んできたのか、巨大な鍋がシェラの頭へと直撃していた。
「い、いたい……」
「だ、大丈夫ですか？」
　うずくまったシェラの横で、床に落ちた鍋がグワングワンとうめき声を上げる。レインは鍋を持ち上げると、不思議そうにアルマの顔を見やる。
「どっから飛んできたんだ、この鍋は」
「さ、さあ……時折ポルターガイスト現象が起こるのよね」
「そんな店、だれも寄り付かないだろ……」
　レインのもっともな意見に、アルマが息を詰まらせる。第三者の目から見ていたニオは、アルマが鍋をシェラに投げつけるのを見逃していなかった。
「うぅ……」
　うめき声を上げつつ頭を抑え、シェラがゆっくりと立ち上がる。寄り添うニオとレインに連れられて、調理場へと下がっていった。
「大丈夫？　シェラ」
「うん、なんとか……」
　氷水で冷やしたタオルを、こぶができてしまった額へとあてる。傷口にしみたのか一瞬だけ顔をしかめた。
「ポルターガイスト現象か……大丈夫なのか、この店は」
　心配そうに腕を組んでうめくレイン。ニオはケラケラと笑いながら、シェラの背中をバンと叩いた。
「大丈夫大丈夫！　シェラはこう見えても結構丈夫だし、ポルターガイストなんてめったに起こらないし！」

「それならいいんだが……シェラさんも気をつけてくださいね？」
「は、はい……」
シェラの視界の隅に、ちらりと人影が映る。どうやらアルマが仕事をしながら、またなにか失言しないか見張っているらしい。
「それはそうとニオ。学校はどうした？」
「うん、今日は創立記念日で休みなんだ」
「帰ってくるたびに創立記念日のような気がするんだが……」
「そんなの気のせいよ、お父さん」
ポンポンとレインの肩を叩き、ニオはにっこりと微笑んだ。横でシェラが不思議そうに、二人の会話へと入り込む。
「あれ？　ニオって学校いってな……」
バギャッ！
「っあ！」
視界の隅から飛んできたまな板が、再びシェラを襲う。鍋が直撃した患部と同じ場所にぶつけられた痛みに、シェラは声にならない悲鳴を上げていた。
床に落ちたまな板がゴトンという音を最後に、辺りは静寂に包まれていく。痛みをこらえながらシェラが顔を上げると、アルマの手には包丁が握られていた。
『余計なことをしゃべるなよ……』
獲物をじっと見つめる鷹のような目から伝わる、アルマの無言の圧力。シェラは身震いしながら命の危険すら感じていた。
無言のまま何度も頷くと、アルマはフッとシェラの視界から消えていった。どうやら仕事へと戻ったらしい。
「本当に大丈夫なのかニオ。今度はまな板が飛んできたぞ？　仕事のついでに高名な霊媒師でも探してきてやろうか？」
シェラの様態を伺いながら、心配そうにレインがニオに告げる。ニオは頭を掻きながら、愛想笑いを浮かべるしかなかった。

## その５：高級酢

その日のオートエーガンは普段よりも二時間早く閉店になった。後片付けを手伝うニオとシェラをよそに、アルマとレインは二人イチャイチャしながら見つめあっている。
「アルマさんって、本当にレインさんのことが好きなんだね」
「そりゃまあ、条件として禁酒をあげられても、結婚したぐらいだからねぇ」
　クスクスと互いに笑いながら、片付けはちゃくちゃくと進んでいった。使った食器を全部洗って食器棚へと戻し、調理に使ったフライパンやなべを洗った後に火にかけて水気を飛ばす。
「お母さん、終わったよ」
「おっ、ありがとう。なかなか手際がよくなってきたね」
「へへへ、まあね」
　ニオの横で口を開きそうになったシェラに、すかさずアルマがにらみつける。どうやらシェラがまた余計なことを言いそうだということを察知したらしい。
「それじゃあ、今日はおれが夕食を作ってやるか」
「えっ、本当に？」
「ああ、最近ちょっと料理の勉強を始めたんだ。大したものはまだ作れないけどね」
　そういってレインは腕をまくり、冷蔵庫のものを物色し始めた。豚肉や玉ねぎなどの材料を取り出し、次に調味料を物色し始める。
「えっと醤油は……」
　言いながら手につかんだのは、カモフラージュのために醤油のラベルが貼られているお酒だった。
「うおっと！　ちょっと待ったぁ！」
　アルマが慌ててレインの腕から醤油――というよりお酒を奪い、棚へと戻す。

「なんだなんだ、どうしたんだよ」
「こ、これは、醤油じゃない――じゃなくて……」
「？？」
あっけにとられているレインを横目に、アルマは流しの下にある本物の醤油を取り出した。
「ほら、醤油はここだから」
「じゃあ、この醤油は？」
「そ、それは、その……こ、高級醤油よ！」
我ながらうまい言い訳だと確信したのか、自身ありげにうんうんと頷く。
「その醤油は普通の醤油と比べて五倍もの値段のする高級品なの。だからビンもどことなく丈夫そうでしょ？」
「まあ、確かにな……でもどうせ料理を使うんだったら、高級品を使ったほうが……」
「だめだめ！　それはお客様のための醤油なの！　わたしたちは安物の醤油で十分！」
「そうか？　それならいいが……あとはみりんだな。みりんは……っと、ここか」
高級醤油の隣にあったビンをつかみ、持っていこうとするレインを、再びアルマがとめた。
「こ、これは高級みりんなの！　安物のみりんでいいって！」
「そうか？　それなら酢はと……」
「うあああああ！　それは高級酢！」
アルマの絶叫がその後も響き渡っていくのを、声を抑えつつニオが笑っている。
「わたしたち、ウォルガレンの滝まで散歩してくるね。いこっ、シエラ」
「ああ、出来上がったら呼びにいく。父さんの料理を楽しみにしてるんだぞ」
「うん！」

現場の状況におろおろしているシェラの手をつかむと、ニオは外へと引っ張っていった。

## その６：夫婦の会話

ようやく調味料の準備が整ったレインは、流しで手を洗って準備を始めた。その横でアルマは息を切らせて、テーブルへと突っ伏している。

「どうしたんだ、アルマ」

「いや……なんでもない、料理頑張って」

「ああ、まかせとけって」

職場でも料理を作っているのか、レインの手際はかなりいいほうだった――といっても、本職であるニオやアルマには到底かなわないが……。

「ニオは元気そうだな」

玉ねぎを包丁で切りながら、レインがアルマに問いかける。アルマは突っ伏したまま、その問いに答えた。

「当たり前だろ？　わたしと……レインの娘なんだ」

「そうだな」

「そっちこそ、仕事の調子はどうなんだ？」

ピタッと、レインの手が止まる。怪訝そうに眺めるアルマを確認してから、レインの手は再び動き出した。

「順調さ。なにもかも」

「相変わらず、嘘は下手だね……」

「どうして？」

「目が笑ってない」

一度咳払いしてから、うっすらと笑ってみせるレイン。それでもアルマは首を振った。

「なあ、もうここに住めばいいじゃないか。オートエーガンの収入は、昔に比べて二倍にも三倍にもなってる。わざわざ単身赴任をする必要なんて……」

「帰ってくると、いつもその話になるな」

涙目になった瞳を拭いつつ訴えかけたアルマに、今度はレインが首を振る番だった。
「そりゃ、おれはこの街が嫌いってわけじゃない。だけど一つの場所に居座るなんて、性に合わないんだ。アルマもそれは承知の上だろ」
「そうだけど。でもそろそろいいんじゃない？　ニオだってきっと……」
「悪いな……」
アルマの言葉を遮って告げると、レインは黙々と料理へと打ち込みだしていた。
「……バカ野郎」
アルマもそれ以上は嘆願せずに、うなだれてしまった。レインの料理の音に混じって、柱時計の音が普段よりも大きく聞こえてくる。
「これでよしと。じゃあニオを呼んでくるから」
テーブルの上に出来上がったのは、カツ丼と味噌汁、そしてきゅうりとわかめの酢の物だった。
「勝手にしろよ」
ふくれっつらでそっぽを向くアルマの頭を、優しいしぐさで撫でる。拭いそびれた涙が、アルマの瞳から一粒だけこぼれていった。

## その7：談笑

ニオとシェラの散歩は、ウォルガレンの滝の前で止まっていた。まだ時間も遅くないせいか、人の姿もちらほらと見える。
だが、すでに日は沈んでいるため、滝は淡い光を放っていた。普段見慣れているこの光景は、いまでも身震いさせる。
「なんだかさあ」
滝を眺めていたシェラが、おもむろに口を開いた。ニオの頭が大きくかしげられる。
「レインさんやアルマさんやニオを見てると、家族っていいもんだなって思うよね」
「そうかな？」
「お互いがお互いを、心の底から信頼しているってのが分かる。わたしはもう両親が亡くなってるから、よけいそう感じるのかもしれないけどね」
柔らかな笑みを放ちながら、寂しげにつぶやく。シェラが家族について語ったのは、これが初めてだった。
「シェラの故郷って、どんなところなの？」
「わたしの故郷ね……ここから南にずっと行ったところにある、なにもない小さな村だよ。本当に、なにもない……ね」
「そっか……」
なぜかそれ以上聞いてはいけないような気がして、ニオは口をつぐんだ。シェラの横顔から憂いが漂ってくる。
代わりにかけてあげる言葉を、ニオは必死に探した。少しでもシェラの憂いを除いてあげたかった。
「ねえ、シェラ」
「ん？」
「わたしとシェラも、もう家族みたいなもんじゃない。いつも一緒に仕事して、一緒に笑ったり怒ったりして。だから、そんなに悲し

まないで？」
　予想外のニオの励ましに、大きく目を見開く。そして次の瞬間には、笑いながらニオの肩をバンバンと叩いていた。
「ちょ、シェラ、痛いよ」
「そうだね。わたしたちも家族みたいなものかもね。助け合って、励ましあって」
「そうそう。これからもずっと一緒だよ！」
　ニオの首筋に腕をまわし、ギュッと引き寄せる。そのままシェラはニオの頭にコブシをこすりつけた。
「ちょっ、痛い、痛いって！」
「まったく、年下のくせに生意気な口きいちゃって！」
「ご、ごめんなさいって！　痛いよ！」
　ピタッと手を止めたシェラはそのままニオを抱きしめていた。
「本当に、ニオと出会えてよかったよ」
「またそんなこと言って、大袈裟な……」
「大袈裟なもんか」
　ニオを抱きしめたまま、シェラは顔を上げる。大量に流れる水の音が、突如大音量でシェラの耳へと届いていた。
「この滝にもずいぶん救われたわ。わたしはマスカーレイドに来ることで、生まれ変われたのかもしれない」
「どうしちゃったの急に、おセンチになっちゃって」
「おセンチなんて、いまの若い子は言わないよ……」
　シェラから開放され、ニオが大きく背伸びをする。と、そこに一人の男性が近寄ってきた。
「やっぱりここか」
「お父さん」
　それは二人を呼びに来たレインだった。
「ご飯のしたくできたから、帰って食べよう。もちろんシェラさんもどうぞ」
「えっ、いいんですか？　家族水入らずなのに……」

「もちろん。オートエーガンの店員は家族も同然ですよ」
白い歯を見せたレインに、再びシェラの顔が真っ赤に染まる。だが、レインはシェラのようすに気がつかずに、滝のほうへと視線をやった。
「ウォルガレンの滝か……話によると、この滝が狙われたそうだな」
「えっ、なんで知ってるの？」
「通行証の提示のときにノルンから聞いた。まったく、ろくなこと考えない奴だ」
レインはぼやきながら、シェラの肩に手をやった。ビクッとシェラの体が大きく揺れる。
「そうは思いませんか？」
「は、はひ！　そう思いまふ！」
直立不動のまま硬直したシェラを見て、ニオがプッと吹きだす。レインはニオの笑いの原因が分からないまま、ニオにも声をかける。
「ニオ、明日からもアルマのこと頼んだぞ。あまりお酒を飲みすぎるなってな」
「わかってるって。お父さんも仕事頑張ってね！」
当たり前のような親子の会話だが、舞い上がっていたシェラを一瞬にして我に返らせるには十分だった。
「ちょ、ちょっと！」
「ん、どうかした？」
「だって、いま、アルマさんにお酒って……」
慌てふためくシェラに二人は顔を見合わせた後に、夜空に響き渡る大笑を放つ。通行人が驚き、一斉にニオとレインのほうを振り向いていた。
「な、なにがおかしいの？」
「実をいうとね、お父さんはもう知ってるの」
「へっ？」
脱力感に実を奪われて、シェラの両腕がダランと垂れる。
「アルマがおれを騙そうなんて百億万年早いってことさ。だいたい

アルマが禁酒なんてできるわけないだろ？　それに棚いっぱいに調味料が並んでればだれだって気づくってんだ」
「そうそう。同じ棚に醤油が三本も四本もあるもんね」
「今回はそこを突っ込むために、わざと料理を練習してきたんだ。調味料を使おうとしたらなんてごまかすかと思ってな」
「まさか高級醤油なんて言うとは思わなかったよね」
「慌てっぷりが半端じゃなかったよな」
声を押し殺して笑う二人に、シェラは一人ぽかーんと口を開けて呆然としていた。
そんなシェラに二人は駆け寄り、シェラを中心に三人で肩を組む。
「アルマには内緒だぞ？　これから先もからかい続けるつもりだからな」
「そうそう、いつもからかわれてるわたしが、確実に一杯食わせられる日なんだから、邪魔しちゃダメだよ？」
そのまま三人は笑いつつ、ウォルガレンの滝をあとにした。ポカンとしたまま止まっている通行人の中ウォルガレンの滝だけが、流れる水流で確実に時を刻んでいった。

## その８：勇気あるシェラの行動

夜が明けて、レインは早々にオートエーガンを去っていった。次の配達をこなすためだ。

レインを見送ったニオとアルマは、またいつもの生活――ニオは店の準備に、アルマは飲酒に勤しむ――へと戻っていく。棚に並んだ高級調味料は、いまはすべてもとの姿へと戻っていた。

「お母さん、お酒はほどほどにしないとだめだよ？」

昨夜のレインの忠告どおり、アルマへと忠告する。だが、アルマは一日のブランクがある分いつもより飲むペースが速いようだ。

「おはよう！　あれ、レインさんは？」

定時に出勤してきたシェラが、厨房を見渡す。いつもの風景に少しホッとしながらも、どこか残念な気持ちもあった。

「さっき仕事に戻ったところさ。もうこのマスカーレイドにはいないだろうよ」

「あれ、おかしいなあ？」

アルマに説明を受けて、シェラが腕を組んだ。そして首をかしげながら、

「さっき、忘れ物をしたからって、オートエーガンに向かってたんだけど」

ガタタンッ！

慌てすぎて椅子から転げ落ちたアルマは、即座に引き出しから調味料のラベルを取り出していた。そのまま棚の酒瓶に、ひとつひとつ丁寧に貼っていく。

ニオもその作業を手伝おうと、アルマのそばへと近寄っていこうとした。その途中で、視界の隅のシェラが頬を膨らませているのに気がつく。

「シェラ……もしかして？」

ニオの質問に我慢しきれなくなったシェラが、室内へと絶叫に近

い笑いを響かせる。
「へへ、ばれた？　うっ、そっ。嘘だよ、アルマさん」
ピタッとアルマの手が止まる。まるで油の切れそうなロボットのように、ゆっくりカクカクと首を回転させる。
「シェラ……」
「へへへ、ちょっとした茶目っ気だって。アルマさ……」
「血が、見たいのか？」
アルマの手に細長い物体が握られる。それはなんと包丁だった。
「ちょ、アルマさん、冗談だって！」
「うるさい！　わたしをからかおうなんて根性、叩きなおしてやる！」
「うわあああ！　お母さん、落ち着いてぇ！」
厨房内を走り回る三人の振動で、落下した食器が甲高い音をたてて割れていく。
通常営業に戻ったオートエーガンの初日は、前途多難な滑り出しだった。

## その８：勇気あるシェラの行動（後書き）

こんにちは、水鏡樹です。
マスカーレイドに異常なし！？第６話　レイン帰宅
いかがだったでしょうか？
グロス一家の関係を、シェラの視点を主にして分かりやすく書いたつもりなのですが、上手に伝わっていれば幸いです。
お暇な方はよろしければ、感想＆評価をいただけると力になります♪
最近は少し更新が遅れ気味ですが、これからもよろしくお願いします m（＿　＿）m
ではでは♪

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9059a/

マスカーレイドに異常なし！？　第６話　レイン帰宅

2010年10月8日15時36分発行